ときのそらが幻想入り

みずnZk

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『――――幻想郷に、天使が舞い降りた』

ホロライブ所属のアイドル、ときのそら。

２０歳の誕生日を迎えた日、後輩たちからのプレゼントを受け取っていた。しかし、その中の１つを開くと、突如として幻想入りしてしまう。

楽しいはずの誕生日、それが一変。まさに絶体絶命の危機の中、運良く人形師アリス・マーガトロイドに拾われる。

少女が挑むは、不可思議な幻想の郷。アイドルとして何を想い、何を成すのか――――

【この物語はホロライブ　所属Ｖｔｕｂｅｒときのそら×東方Ｐｒｏｊｅｃｔのクロスオーバー２次創作小説です。『人の数だけ幻想郷』をモットーに、しかし極力一般的な解釈に基づいて執筆しております】

目次

01—1　天使のそら　———　1

01―1　天使のそら

――――幻想郷に、天使が舞い降りた。

ある日、その郷を駆け抜けた噂話。澄み渡る青空、照り付ける太陽。まさに快晴と呼べる空の下。その存在は、何の前触れもなく飛来したという。

『てんし』という響き。幻想郷に住まう一部の者ならば、別の人物を連想するだろう。しかし、今回は毛色が違う。

宙を舞うのは、純白の翼。はためかせるのは、青い衣を纏うヒトガタ。

その姿は、まるでお伽話にでも出てくるような――――紛うことなき、天使だった、と。

無論、こんな噂がタダで広まるほど、この郷に住まう者は酔狂ではない。

『幻想郷』には、神、妖怪、悪魔など。凡ゆる種族が生息しているのだ。背に翼を持つモノなど無数に存在する中で、今更そのような噂話など、通常ならば子どもの戯言程度にしか思われなかっただろう。

だが、広まった。とある新聞、その一面に堂々と載せられた写真によって。

太陽を背に舞う『天使』の姿を、伝統の幻想ブン屋は幸運にも激写した。写真という確固たる証拠。美しく空を覆う翼に、人々は魅入られた。故の拡散、伝染、周知。

それに対して、幻想郷の住民の反応は様々だ。

ある巫女は、顔を顰める。新たな異変の前兆なのではないか、と。

ある魔法使いは、好奇心を抱く。もしも本物ならば話してみたい、と。

ある賢者は、訝しむ。何故、そのような存在が飛来したのか、と。

ある吸血鬼は、ほくそ笑む。良い暇潰しになりそうだ、と。

そして、とある人形師――――アリス・マーガトロイドは新聞を指差して、こう問いかけた。

「……これ、貴女じゃないの？」

「――――私、一面を飾ってるぅぅぅッ!?」

新聞を目にした天使こと『ときのそら』は、珍しく叫び声を響かせた。

×

×

数日前、ホロライブ事務所。
その日、私はお祝いされていた。
バーチャルアイドル、ときのそら。ホロライブというグループに属する1人。
この活動を始めて、3回目の誕生日。大人の仲間入りとなる20歳となったこの日。
事務所にて、可愛い後輩たちからプレゼントを受け取っていた。
個性が無い。そう嘆いたのは、いつだったか。気がつけば、CDを出した。ライブをした。女優になった。そして何より、頼もしい仲間に囲まれた。
みんなの想いが詰まったプレゼント。受け取るたびに、胸が熱くなる。
「そら先輩っ！これ、受け取ってください！」
そして、次にプレゼントを贈ってくれたのは、魔法使い――――　紫咲シオンちゃんだった。
渡されたのは、白い箱型。リボンで結んでいる。まさしく、ザ・プレゼントって感じ。
「えーっ？　シオンのことだから、なんかビックリ箱みたいな感じじゃないの～？」
「そーぺこねぇ？　開けたら魔法でドカーン、みたいな。そーいう雰囲気を感じるぺこ」

そんな風に茶化すのは、夏色まつりちゃんと兎田ぺこらちゃん。シオンちゃんの日頃の行い？　故なのか。妙に懐疑的だ。ちなみに、視界の隅で殺気を纏うのは、さくらみこちゃん。「そらちゃんにそんなことしたら、許さないにぇ……」なんて声が密やかに聞こえる。ちょっと物騒。

「あのねぇ……　そら先輩なんだから、そんなことするわけないでしょ？　……2人ならまだしも」

「それ差別では？」

「シオン先輩への誕プレは腐った人参にするぺこ」

アイドルとしてのシオンちゃん、その人気の1つが時折見せる生意気っぽい口調と表情だ。その姿が可愛らしいのは私も理解できる。でも、だからと言って煽るのは良くない。だから、

「まぁまぁ、2人とも。シオンちゃんも、そんなことしたらメっ、だよ？　でも、ありがとうっ！　……開けてみて良い？」

私は、2人を窘めながらそう言った。つまりは中身が普通の物だと証明することが出来れば良いのだ。そうすれば、まつりちゃんとぺこらちゃん、そしてみこちゃんの疑念も晴れるはず。

後輩ちゃんや友達、そらともさんたちのプレゼントは後でゆっくり開封するつもり

だったが、この1つは例外ということで。私はリボンに手を掛けた。手元とプレゼントにみんなの視線が走る。シオンちゃんのドヤ顔。まつりちゃんとぺこらちゃんのジト目。みこちゃんの殺気。そして、私のワクワク。解いたリボンは記念に取っておくとして、次はいよいよご開帳。

———だが、蓋を開けたその時だった。

目が眩むような光が、箱から発せられたのだ。そんな現象を前に、私は問おうとする。〝えっ？　本当にビックリ箱だったの？〟と。しかし、その言葉を発することは無かった。だって、シオンちゃんの表情は誰がどう見ても見事なまでに焦っていた。『やらかした……』そんな想いが伝わる、そんなお顔。だが、既に光はひとしきり肥大化して、私を包み込んでしまった。あまりの輝きに手で顔を覆って———

こうして、この世界から『ときのそら』という存在は消失した。

×

×

光の次に感じたモノは、風だった。

身体を打ち付ける、猛烈な強風。存在そのものが千切れて喪失してしまうのでは、と。そんな錯覚を抱くほど。では、何故このような風に身を晒されてるのか。それは、

〝私、堕ちてる……!?〟

声にはならない叫びを漏らす。そう、今置かれてる状況は、落下――――否。そんな表現では生温い。これは、まさしく墜落だ。

即ち私、ときのそらは何故か――――パラシュート無しのスカイダイビングを敢行している。

どうして、こんなことになったのか。不明な点が多い中で、分かることが2つある。

一つ、シオンちゃんがトンデモナイ大失敗をしてしまったこと。

そして二つ、このままでは、遅かれ早かれ絶命することだ。

強風故に、目を上手く開けられない。だが、このままでは地上に接触することになる。そうなれば、この身体が踏み潰されたトマトみたいになるのが必然。仮に地上がなく、永遠に続く奈落へ堕ちているのだとしても、いずれは強風により身体が限界を迎えるだろう。

ならば、話は早い。まずは状況に歯止めを掛ければ良いだけのこと。

頭に過るのは、後輩にして魔法使いの紫咲シオン。以前、彼女から貰った、もう一つのプレゼントを使用する。

私はただのアイドルだ。魔法使いではない。だから理屈は分からないが、あの時の奇跡を再現する。唱える想いは、ただ一つ。即ち、

〝――――空を自由に、飛びたいなっ!!〟

瞬間、風は緩やかに。墜落は減衰し、身体は浮遊感を抱いた。背中にあるのは、翼。以前、シオンちゃんに生やしてもらった白鳥をイメージしたサラサラの羽根、のはずだったのが。

「……なんか、大っきい?」

まともに声が出せること、そして目を開けられることへの安心感を覚えながら、背中を確認。生えた翼は以前よりも大きくて立派。なんか、どことなく天使っぽい感じ。でもまぁ、飛べてるから問題無し。それよりも、

「ここ、どこ……?」

今は、目の前に広がる景色の方が問題だった。空から視認できる光景は、見渡す限りの緑。具体的に言えば、森。地球上、このような場所は当然ながら存在はするだろう。しかし、私が先ほどまで居た場所は、ホロライブの事務所。オフィスが建ち並ぶ『都市』だ。ものの数分で、こんな光景をお目にかかれるなど通常ではありえない。

ぱたぱた、と浮遊しながら思案する。次にどうするか、を。自分がいる場所を確認しようのも手段がない。携帯は事務所に置いてきてしまった。例えあったとしても電波

が通じるような場所なのか、不透明だ。そうなると残された手段は、誰かに聞く。コレしかない、そう思い立った時だった。

視界の隅に、動くナニカを見た。

脳裏を反芻する、黒い残像。最初はカラスかと思った。でも、違う。人のような形が、一瞬だが瞳にはっきり映った。

待って、そう口に出そうとした。身体が反応して、その存在がいた方向に身体を向けて追いかけようとする。しかし、

〝あ、れ――――？〟

高度が、下がる。先ほどのような勢いは無いものの、確実に堕ちていく。　理由は一切不明。「ぬーーーーん!!!!!!」なんて力を込めて、全力でぱたぱたする。しかし、高度は落ちる一方だ。

「はっ、ぁ……！」

不意に、息が漏れた。そして、切れる。心臓が早鐘を打った。先ほど、遥か上空にいた時より、苦しさを覚える。額から落ちる汗、舌を出して犬のように息を求めた。なんて、みっともない。

この段階で、先ほどのナニカを追跡するのは困難であることは明確。くらくらと揺れる視界の中で、とりあえず安全に着地することに注力する。

木々の合間をすり抜けて、草が生え並ぶ地上へゆったりと着陸。　しかし、パラシュート抜きのスカイダイビングを生き抜いた喜びは無い。崩れるように膝をついた。草のチクっとする感触がくすぐったい。

身体のコンディションは、まともでは無かった。目眩が止まらず、全身が悲鳴をあげている。

ポタポタ、と溢れ出る汗が大地を濡らした。気が付けば、翼は消失している。いかなる要因かは不明だが、今は生やすことすら出来なさそうだ。

状況は、最悪だった。

知らない土地、知らない森。そんな場所に一人降り立った。

助けを呼ぼうにも、手段が無い。身体は動かず、水も食料も無い。

休めば、幾分かは回復するだろう。しかし、だから何だというのか。

これまで、日本という国で、特に不自由無く過ごしてきたのだ。突然、サバイバルなんて出来るわけが無い。

そんな事実を改めて理解すれば、更に身体から力が抜けた。仰向けに転がり、青い空を見る。もう何も考えられない。否、考えたくない。

思案を打ち切り空っぽになった頭の中。その代わりに思い浮かべるのは、友だちや後輩のみんな。そして、かけがえの無い親友。

〝これが走馬灯、なのかな……？〟

ぼんやりと、そんなことを思う。抱いた、目標があった。叶えたい、夢があった。そのために、一生懸命に歩んできたのに。まだ、止まりたくない。だというのに。瞼は、意に反して重くなる。もう身体は、自分の意志では動かないのだと。そう理解した、その時だった。

「――――ちょっと、大丈夫？」

閉じかけた視界が、僅かに開く。

誰もいないはずの此処に、誰かが私の顔を覗き込んでいた。

不意に、風が吹く。金色の髪が、私の瞳の中で、ふわりと靡いた。

あぁ、まるで、

お人形さん、みたいに、

綺麗だ、な――――――――――――

×　×

その昼下がり、人形師は森の中を歩いていた。
照り付ける五月の日差し。少しばかり暑さを感じれば、次に来るのは和やかな風。
人里へ出向いていた彼女。何もなければ、このまま住処へと戻る予定だった。
しかし、視界の隅にナニカが映る。
草木が立ち並ぶ空間に、明らかに不自然の青の色。立ち止まり見つめれば、それは人だった。うつ伏せに横たわり、宙を見上げている。
こんなところで、昼寝だろうか。そんな風に考えながら、気になったので近づいてみた。
見知らぬ顔。そして、見慣れない格好。可愛らしい、女の子。
そんな姿を覗き込んだ瞬間、昼寝などという考えは間違いだと気がつく。随分と顔色

が悪かった。

「――――ちょっと、大丈夫？」

そんな風に問いかければ、僅かながらに瞼が開いた。しかし、反応はそれだけ。すぐに、眠ってしまった。

一体、この少女に何があったのか。人形師は屈み、頬を撫でた。とりあえず、放っておくわけにもいかない。

故に、展開する。自らが操る人形を。

魔力を込めて、複数体を使役する。眠れる少女が、容易く持ち上がった。

向かう場所は、人形師の住処。魔法の森の洋館。名も知らぬ客人と供に、帰路へ着いた。

この時、人形師は知らなかった。

自らが持ち帰った、この少女が――――幻想郷にとある一大ムーブメントを、巻き起こすことを。